

る日、日本人居留民団本部から引揚げの日時携行品等の確報が示された。八月六日六時出発であったから、指示された内容によって、一人千円、着替えの衣類と食糧二日分をリュックに詰めて、予定のとおり新京駅を出発、一路南下、錦州収容所に午後六時到着するこ
とができた。

八月二十四日、コロ島に日の丸の旗をなびかせ待機していた引揚船リパティール号に二千五百人の引揚者が乗船。ドラの音と共に出航やつと追われる立場から解放されて祖国の土を踏める喜びで一杯であった。

満州生活の辛苦

山形県 後 藤 栄 吉

私は、戦後引揚げてから四十有余年、若き日に体験した苦汁の断片を書きのこし、子供達には勿論、孫達にまで、祖父である私を理解するために、また戦争防止と平和の一助にしたいと思い執筆した。

昭和十五年頃から統制経済が厳しくなつて、私が職人見習いとして働いていた菓子製造業の商店は原材料不足から商売は貧窮に落ち込んだので、二十一歳だった私はこのままでは将来のことを思い焦り悩んでいた。

そんな或日、満州大陸に義勇軍として出発する人々を駅に見送ったことがあり、その時でした、よし、私も何とかして大陸に行こうと決心したのであった。

しかし、商店の主人も、兄も姉も反対であったが、唯、天童の親戚野川家だけは理解を示してくれたので、四面楚歌の中に一筋の光を見出して有難かった。

その年の十二月、又従兄弟の喜五郎さんが満州にいたので、私から希望を打ち明けていた返事に、直ぐ来い心配無し、と嬉しい便りである。兄と姉を説得して許しを得たので、早速、店から暇をとりました。

愈々、昭和一六年二月二十四日出発、母の作つてくれた握り飯、紙製のトランクにタオル二本、足袋三足、日記帳一冊、襦袢二枚、金三十円、これが私の全財産でした。

母は、お前あんな遠い寒い所に行ってしまうのか、と幾度も繰り返していた。よし、この母のために、どんな困難でも打ち勝つ。と心の奥に刻み決心した。

山形県の天童駅から出発、東京、下関、朝鮮通過、

三月五日満州の克音河駅に到着、北満の地に第一歩を踏みしめた。

喜五郎さんの出迎えをうけて綏稜街の瑞穂村弁事処に一泊し、翌日、喜五郎さんの家を訪問、千代奥さん、慶一郎君が心から歓迎してくれた。

冬期のこととて手伝う仕事も無かったが、春耕の準備に、やがて春をむかえて一生懸命働いていた、さんと輝く太陽の下、愛馬の背の上で、支那の夜、を声高らかに唄い、俺は、この満州で成功し骨を埋めると心の中で叫んでいた。

そんなある日、村山部落長から弁事処で働く気ないか、とのこと。これこそ絶好の機会と私は早速承諾の返事をした。

あとで判ったが、希望者五人いたが、喜五郎さんは部落から高く評価されていたので、その家族ならとい

う目に見えない信用が実を結んだのだった。

私の月給は五十五円、義務貯金三円五十銭、合作社貯金十五円七十銭、食事代三十円、残りはたった五円七十五銭でした。

弁事処で公務処理のことは大切であり責任と希望が芽生えて意義ある毎日であった。

しかし、人生に得手に帆を揚げよとある如く、山形県にいた時、七年間の菓子製造した経験を生かしたい念願から、瑞穂村長に相談したところ、君なら必ず成功すると言って下さって、退団手続きをしてくれた。

私は涙の出るほど嬉しくて仕方なかった、誠意をもって当れば、私のような者でも皆さんが信用してくれる、命がけて頑張らねばならないと固く固く自らに誓うのであった。

昭和十七年九月、開店準備の金策のため一時帰国し、菓子製造の器具一式と金一千円を借用して一週間滞りして又渡満した。

開店の場所は綏稜街の西大街、レンガ作りの家で家賃六か月で二〇〇円、従業員は満人四人で十二月十日

開店、渡満して一年十か月で自分の店を持った興奮で胸が大きくふくらむのを感じたものである。

開拓団、県公署、合作社、協和会、満鉄、電々公社の人達と祝杯をあげた、初心を忘れずに正直に懸命に頑張ろうと我が身に又も誓った。そのころ、郷里の兄と姉がすすめてくれた嫁は天童市松田惣松の娘、はるゑは婿（私）のいない姉の家で結婚式をあげると言う便りである、自然と笑顔になった、私のために遠い満州に一人で来てくれるとは、感謝にたえない、暖かく迎えようと、ハルビン駅まで出迎えに出発した私の足どりは軽かった。

寒いハルビン駅のホームの片隅に不安そうにはるゑ、は着物姿で立っていた。縁は異なもの味なもの、こうして私達二人は結ばれたのである。

昭和十九年三月九日、結婚して丸一年経ったばかりなのに、私に召集令状がきた、私はとうとう来たかと思ふとき、七か月の腹をかかえたはるゑは泣いた。唯泣くばかり。

思えば身も心も傾けて築いた店、再び帰ることがで

きないのではないか、と思うと死ぬよりも辛く断腸の思いである。朝早く道路の真ん中に出て一人淋しく手を振るはるゑの姿が今も目に浮んでくる時がある。

昭和十九年三月十日ハルビン第四〇六部隊に入隊、昨日に変わる今日の軍隊生活、この生活何年続くやらと考えるとき、一人で涙が出てくる。

しかし、軍隊の訓練に追われ、店のこと、妻のことも思い出す暇がない、六月にチチハルに移動、十月に琿春に移動、翌二十年八月十二日我々四百人でソ連軍と激戦となり二百五十人の死傷者を出した、八月十七日、密江畔で日ソ両軍激戦中、わが軍から白旗をかかげて敵軍に突入したとき、ソ連軍の炸裂の音がびたりと止まって停戦となった。無条件降伏であった、これから私は一年九か月間の捕虜生活である。

二二年六月引揚げてみればはるゑの元氣な姿がありほっとして涙が出た。何もかも失って人生の再出発、まず住宅を探す、はるゑと二人で力を合わせれば何事も成し得る自信に満ちた。